# 接続助詞「し」の意味用法とその来由

京　健治

## 一　はじめに

接続助詞「し」の用法には、〈いくつかの事柄を列叙する用法（1a）〉、〈列叙された事柄を理由・根拠として導かれる判断が後に述べられる用法（1b）〉、〈一つの事実・条件をあげ、それ以外の事柄を言外に込めて類推させる用法（1c）〉がある。

(1) a　このホテルは部屋はきれいだし、料理はうまいし、サービスもよい。

b　事故には遭うし、雨には降られるし、さんざんでした。

c　天気もぱっとしないようだし、しばらく旅行は見合わせましょう。

この接続助詞「し」は並列表現に与る一方で、条件表現にも与るという意味で、複文の観点からも興味深いように思う。接続助詞「し」の用法に関して、現代語研究では後述するように多くの蓄積がある。そこでは、他の表現形式との対照を通して、接続助詞「し」の意味用法上の特徴にも言及がなされている。

筆者は先に接続助詞「し」の成立に関して考察を加えた。[注1] ここでは、現代語研究に於いて、指摘されるところの用法上の特徴（のいくつか）について、この語の発生の経緯をもとに考えてみようと思う。

## 二　現代語接続助詞「し」の意味用法概観

現代語の接続助詞「し」の意味用法に関しては、他の並列表現形式との対照等を中心にこれまでにも多くの研究がある。ここでは、そうした研究のいくつかを取り上げ、接続助詞「し」の用法上の特徴を見てみることにする。

森山卓郎氏「並列述語構文―『たり』『とか』『か』『なり』の意味用法をめぐって―（仁田義雄編『複文の研究』上／くろしお出版／一九九八）では、並列述語構文を主たる対象としたものであるが、そこでは、〈並列の意味〉という観点から「候補的並列」「結合的

並列」「交差的並列」に三分類される。

「候補的並列」とは、「いずれかを選択するという関係での並列」であり、〈選択すべきものとして並列することになっており、述語にも制約があり、通常、義務必要、命令などの選択をせまるような述語が共起する〉というものである。「とか」がこれにあたるという。

(2) 自分で調べるとか人に聞くとかしなくちゃ。

「交差的並列」とは、「前件と後件とが一つの状況のなかでともに成立するという意味での並列関係」であり、〈そのため、矛盾する事態を並列させることはできない〉とされる。「し」と「連用形＋て」がこれにあたるという。

(3) ＊彼の料理は（おいしいし／おいしくて）まずい。

「結合的並列」とは「事態が複数あることを前提としている」ものである。〈矛盾する事態を結合することができる（これは、前件と後件との時空が違うという解釈ができるから）ものである。「たり」がこれにあたるという。

(4) 彼の料理はおいしかったりまずかったりした。

森山論文は、そのタイトルにあるように、並列述語構文を主たる対象とし、それらの形式の意味記述に主眼がある。[注2] なお、接続助詞「し」の用法を主たる対象としたものとしては、前田直子氏「現代日本語における接続助詞「し」の意味・用法―並列と理由の関係を中心に―」（『人文』４／学習院大学人文科学研究所／二〇〇五年）がある。前田論文は接続助詞「し」の意味用法に関する記述が詳しく、先行研究の吟味等に於いて、示唆的な論文である。先行研究で指摘されるところの接続助詞「し」の用法上の特徴については、この前田論文に於いて基本的に取り上げられているので、以下、当該論文での記述を中心に見ていくことにしたい。

ここでは、前田論文に指摘されるところの「し」の用法上の特徴を箇条書きの形で示す。

①【「し」は、判断のレベルまでを含みうる独立性の高い従属節を並列させる統語的機能を持つ。】

(5) あのレストランは、料理もおいしいし、値段も安い。

（5）では、「あのレストラン」の持つ特徴として、「料理がおいしいこと」と「値段が安いこと」を並列する、とする。

②【「し」は「だろう」や「のだ」といった判断のレベルを表すモダリティ要素に接続することができ（中俣尚己 二〇〇五）[注3]、この点で他の並列を表すと言われる表現、例えばテ形や連用形、「～も～ば」とは一線を画している。】

(6) a お金もある｛だろう／のだ｝し、時間もある。

b お金もあって、時間もある。

c お金もあり、時間もある。

d　お金もあれば、時間もある。

③【対等な関係を示す事態であっても、列挙できるとは限らない場合もある。】

(7) a　?? 私はオーストラリア人だし、名前はジョーです、

b　?? 父は会社員だし、親切です。

c　?? 東京は日本の首都だし、パリはフランスの首都だ。

d　?? エジソンは電球を発明したし、ベルは電話を発明した。

e　?? おじいさんは山へ柴刈りに行ったし、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

（7）のような振る舞いから、「これらの例文は文脈がなければ不自然である。」とされる。

たしかに、（7）のような言い方は不自然である。先の森山氏が述べるところの「し」の並列用法としての性格（＝交差的並列）との関わりとも思えない。（7a）「私が」「オーストラリア人である」ことと「（私の）名前がジョーであることとは矛盾しないであろう。ちなみに、（7）のような場合での言い方としては、

(8) a　私はオーストラリア人で、名前はジョーです。

b　東京は日本の首都で、パリはフランスの首都だ。

c　エジソンは電球を発明し、ベルは電話を発明した。

d　おじいさんは山へ柴刈りに行き、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

のように、連用形接続か「テ形」による接続形式を取るのが自然であろう。

右に見たような「し」の振る舞いから、「し」による並列について、〈「し」の並列用法自体が何らかの条件を必要としており、またそれが文のレベルを超えたものであることが伺える〉と指摘される。なお、ここにいう〈何からの条件〉とは、寺村秀夫氏のいう〈統括命題[注4]〉であると考えておられる。

「…し」という言い方は、文として現れているかいないかは別として、ある一つの命題が意識にあり、それに該当するような動作・出来事を並べる点に特徴があるだろう」

たとえば、（9）について、寺村氏は、「この文は、「彼は音楽の才能がある」という統括命題が背後にあって、その例として、「ピアノを弾く」「作曲をする」「歌が上手だ」という３つの例を挙げたもの」であるという。

(9)　彼はピアノも弾くし、作曲もするし、歌も上手だ。

前田氏も、「し」によってつながれるところの複数の事態には、何らかの「命題」の存在を想定している。また、『日本語文型辞典』[注5]にも「話し手の意識の中で互いに関連しているような事」とある。

ここで、前掲の（7e）を再掲する。

(7) e ⁇ おじいさんは山へ柴刈りに行ったし、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

たしかに、こうした言い方は不自然であるが、何らかの文脈を与えてやるとさほど不自然ではなくなる場合があるように思う。たとえば、誰かが訪問したという状況でのやりとりを想定してみる。

(10) A おうちの人は誰もいないの？

B おじいさんは山へ柴刈りに行ったし、おばあさんは川へ洗濯に行きました。（だからだれも家にはいません）。

文例としてはあまりよろしくないかもしれないが、上のような場面であれば、言えなくはないように思う。これは、おじいさんが山へ柴刈りに行った」ことと「おばあさんが川へ洗濯に行ったこと」を繋げて表現しても、それらが何故にセットで述べられるか、その表現意図が不明確なためであろう。（10）の場合であれば、〈家に誰もいない〉ということを具体的な事例を提示することにより示すことになるので、表現可能となるものであろうと思う。

以上、「～し～し」による並列に於ける用法上の特徴を概観したが、こうした性格が如何にしてもたらされたのかという課題があるように思う。また、接続助詞「し」の理由を示す用法について、〈「ので」や「から」よりもゆるやかな因果関係」「控えめに」といった表現性も指摘されている。

◇『日本語文型辞典』[注6]

理由を表す。「ので」や「から」よりもゆるやかな因果関係で、他にも理由があるという含みがある。

◇『基礎日本語３』[注7]

控えめに、あるいは考え深げに言いさし、そこから導かれる結果・判断を言外に込める暗示的な表現（例：大学へは行きたいけれど、親は反対するしなあ。）。

こうした表現性の来由も考える必要があるように思われるし、そもそも接続助詞「し」に〈並列〉と〈原因理由〉の用法が存するのかも併せて考えておく必要もあろう。

## 三　接続助詞「し」成立の経緯

接続助詞「し」は近世初期頃、以下のように助動詞「まい」「う」に承接する例を以て文献上現れ始める。

(11) a 路次すがら付合をして、付たらは松を取るまいし、ゑ付ずは松をとらふ（虎明本「ふじまつ」）

b 身共がわごりよにてきたひもせまひし、どこなりとも、きりたからふ所から思ひのまゝにきらしめ　（虎明本「ぶあく」）

c 今からは酒もたべまひし、ましていさかひも致まひ、このたびはかんにんしてくだされひ

（虎明本「こひ聟」）

d おのれが西行とおやこではあるまひし、似合わぬ西行だて、ぬかすと云て　（天理本「お冷」）

e よそへ御ざつても、経はしらせられず、勤めはなるまひし、なされ様があるまひと云　（天理本「小傘」）

f 牛は足があつて歩く、道でわれに抱かれうとは云まいし、牛について行計、ならいではと云　（天理本「木六駄」）

(12) a 御世に御出でなされたらば、おれもじや／／馬に乗らうし、其時はそちも乗物に乗せて歩かさうぞ　（好色伝授・中）

b 御前にも喜ばしましよし、又内祝も致しましとぞんじまして　（好色伝授・中）

c 梅川がサア出るに極まらば借銭もあらふし、泣いても二百五十両、　（冥途の飛脚・中）

d さぞ見たからふし、見せたし、一つはあの子が冥加のため、夕霧殿を請出し、一所に伴なひ、暮さんと、　（夕霧阿波鳴渡・上）

発生当初は「まい」「う」に承接していたが、その後、一七〇〇年頃以降、上接語の拡張が観察されるようになる。

(13) a コレ物言ふまい、二三日もあしらはねば、又はづれるし、薬に及ばぬ　（御所桜堀川夜討）

b 若づるがでるし、七こしがでるし、七里がでるし、扇屋のかたうたがでる　（通言総籬）

c 此様な糺明には逢ふし、とんと独り居ても持たぬによって　（漢人漢文手管始）

先述の通り、現代語の接続助詞「し」の用法には、

① 並列の関係を示す

［このホテルは部屋はきれいだし、料理はうまいし、サービスもよい。］

② 一つの事態を提示し、それが下句との関係から見て、「理由」を示す。

［天気もぱっとしないようだし、しばらく旅行は見合わせましょう。］

③ 複数の事態が下句との関係から見て、「理由」を示す。

［地下鉄で行くほうが、運賃は安いし、時間も早いし、ずっと得ですよ。］

があるが、こうした用法は発生段階から見られるものであった。

(14) a 路次すがら付合をして、付たらは松を取るまいし、ゑ付ずは松をとらふ（虎明本「ふじまつ」）　…【用法①】

b 身共がわごりよにてきたひもせまひし、どこなりとも、きりたからふ所から思ひのまゝにきらしめ　（虎明本「ぶあく」）　…【用法②】

c 今からは酒もたべまひし、ましていさかひも致

まひ、このたびはかんにんしてくだされひ
（虎明本「こひ聟」）
…【用法③】

さて、接続助詞「し」の来歴に関しては、たとえば、『日本国語大辞典』「し」の項・補注に示されているように形容詞「―し」語尾との関連が説かれてきた。

中世からみられる、「今昔二八・二」の「心地は悪し、寝入りて物は見ず成りぬれば」、「延慶本平家四・水嶋合戦事」の「船は少し、浪風ははげしかりけり、踏沈めて一人も残らず皆死にけり」のような形容詞終止形による接続用法から、その語尾「し」が遊離独立して生じたものと考えられる。

形容詞の古典語終止形には、(15)のように中止的用法に使用される（以下、「不十分終止」と呼ぶ[注8]）ものが比較的多く見られる。

(15) a　田もなし、畠もなし。村もなし、里もなし。おのづから人はあれども、いふ詞も聞き知らず。
（平家物語・有王）

b　大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるりとふみかへしてンげり。
（平家物語・落足）

c　平家のかたには馬に乗ッたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨のふるやうに射けれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。
（平家物語・一二之懸）

いずれも、現代語の接続助詞「し」による表現に置き換えられそうな用法を有している。右の例は中世前期の例であるが[注9]、こうした形容詞の古典語終止形「―シ」語尾による「不十分終止」は連体形終止の一般化した後の室町期以降の口語資料からも拾い上げられる[注10]。

(16) a　法皇もおん涙を流せられ、おほせくださるる旨もなし、少将も涙にむせび、申しあげらるる旨もござなかった。
（天草版平家物語・36）

b　愚僧が思ふは夜も長し、夜もすがら宗論をして、どちなりともありがたいと聞きいれた方の弟子にならうと思ふが、何とあらうぞ
（虎明本「しうろん」）

c　こゝは山も高し、谷も深し、四方は岩石ぢやほどに、搦手へもたやすうはよもまはらじ、
（天草版平家物語・165）

一般に「連体形終止」が一般化した後において（旧）終止形は口語の世界からは衰退したとされる。しかしながら、キリシタン資料・狂言資料といった中世以降の口語資料には、この衰退したとされる旧終止形がみられるものであり、先の形容詞「―シ」語尾の他にも

以下のように見られる。

(17) a　この北の方は新大納言の娘で、この腹に六代御前と申して十におなりある若君もござっつ、夜叉御前と申して、八つにおなりある姫君もござったが、…　（天草版平家物語・184）

b　「いかに大海、よう聞け。あるほどの串柿は皆汝に与へつ、また先のごとくわだかまって余をたばかるとも、再び串柿をばくらはすることはあるまじいぞ」と。（天草版伊曽保物語・472）

c　ことはりは申しつ・木の本て御酒をまいれト云テ　（『六義』「花折新発意」）

d　甲の鍔をかたむけて、橋は引いつ、敵にはあひたし、鍔をかたむけて立ったところに、　（天草版平家物語・126）

e　実盛心は猛けれども、老武者なり、手は負うつ、二人の敵をあひしらはうとするほどに、手塚が下になって、つひに首をとられた。　（天草版平家物語・170）

f　出ばやとはおもへども、もつといは取たり、五体付はつけたり、爰成窓からちよかと見て、入つ出つもだえた。　（虎寛本「麻生」）

g　相撲は見たし・相手はなし・しよせん身共かとらうといへト云　（『六義』「鼻取相撲」）

さて、接続助詞「し」の来歴には先述の如く、形容詞「し」語尾を起源とする考えが示されているが、この考えには、柏原司郎氏・鈴木浩氏の指摘にあるように、形容詞語尾の「し」が如何なる理由により遊離するに至ったのかという問題がある。[注11] すなわち、接続助詞「し」の具体的な成立過程を考えるにあたっては、発生当初「まい」に承接する例が先行して現れるのは何故かということである。これについては両氏に見解があるが、[注12] 筆者もこのことについて私見を述べた。[注13] その詳細については前稿に譲ることとし、ここでは結論を示す。

接続助詞「し」の発生は、室町期頃に成立を見た接続助詞「けれども」と同様の経緯を経たものではないかと考えたのである。ここで接続助詞「けれども」の発生を参考にしたのは、

○接続助詞「けれども」の発生：「まい」「う」承接例が先行して現れること

○接続助詞「し」の発生：「まい」「う」承接例が先行する形で現れること

のように、両者似通った形で出現することにあった。

接続助詞「けれども」の成立に関するものに、西田絢子氏「『けれども』考―その発生から確立まで―」（『東京成徳短大紀要』11・一九七八年）がある。西田氏は、接続助詞「けれども」は「まいけれども」なる形式が成立した後、これに「まい＋けれども」という異分析がなされ、そこから「けれども」が遊離独立したのではないかと述べられる。「けれども」成立の契

機となった「まいけれども」なる形については、室町期に於いて新たに成立をみた否定推量辞「まい」と旧来の「まじ（い）」とが併用されるという中にあって、旧来の形式「まじけれども」に牽かれて「まいけれども」の形が行われたものであるとされる。

接続助詞「し」の来歴に関しては、先述の如く、形容詞「ーシ」語尾に求められてきたが、その遊離独立という点で問題があった。また、これに加えて、何故に助動詞「まい」に承接する用法が先行するのかという点が問題となっていた。これらの問題を解消すべく、筆者は「まいし」なる形式が何らかの事情（後述）によって発生し、そこから「し」が切り出されること（「まい」＋「し」）になったのではないかと考えた。接続助詞「し」成立に関与したと思しき「まいし」なる語形の成立について注目したのは、以下の「まじし」なる語形である。[注14]

⑱ a　今コ、ニイマメカシク次公カ字ヲ引キコトモヲカシ、、又宋彦材カコトヲ引クコトモアルマシ、イツレ邊ニ彦材ノ二字ハアマリテ見エタ
（四河入海・5ノ2・48ウ）

b　蛟ヲキリ虎ヲ刺ヤウナル事ハ我ハ老テ無力程ニナルマシ、又此ノ剣ヲ佩ハ官吏カ帯牛佩犢ト云テシカルヘキソ（四河入海・12ノ3・38オ）

この「マジシ」の元にあった語は否定推量辞の「マジイ」であり、これを「不十分終止」表現にしようとしたものであろうと考えた。すなわち、「マジイ」の「イ」を「シ」に置き換えたものであろう。「ーイ」語尾を「ーシ」語尾に置き換える形で「不十分終止」用法が為されたのは、室町期以降の形容詞「ーシ」語尾の「不十分終止」用法が背景にあったと思われる。先述の如く、室町期以降に於いて、形容詞「ーシ」語尾が「不十分終止」として使用されていた。例えば、（19ａ）には旧終止形「なし」が対句表現の前句に、新終止形「ない」が後句にみられる。また、（19ｂ）では助動詞「たし」の旧終止形が前句に、新終止形が後句に用いられている。こうした例は「ーシ」語尾の「不十分終止」としての性格を如実に示しているものと言えよう。

⑲ a　西王母が三千歳も昔語りで、今はなし。東方朔が九千歳も名のみ残って、姿はない、これが善知識のもとゐでござると言うて
（天草版平家物語・314）

b　そうじてそれがしハ、人の行なといふ所へハゆきたし、又ミなといふものハミたい、此ぶすハちとミたい事でハないか　（祝本「ぶす」）

先の「マジシ」は以下のような対応関係により成立を見たものであろう。

⑳「ない」：「なし」＝「まじい」：「まじし」

この「マジシ」を介して成立したのが「マイシ」であろうと思う。

(21) 「まじし」〔「マジイ」の「不十分終止」化〕≒「まいし」 ↓ 〈「まい」＋「し」〉〔異分析〕 ↓ 「し」【一語化】

（cf 「まじけれ＋ども」≒「まいけれども」↓〈「まい」＋「けれども」〉↓「けれども」【一語化】）

## 四　接続助詞「し」の意味用法の検討

前節では、接続助詞「し」の成立過程を確認した。ここでは、その発生経緯を踏まえて、第二節に見たところの接続助詞「し」の意味用法上の特徴との関連を考えてみたい。

先に見たように、接続助詞「し」には、〈①並列の関係を示す〉〈②一つの事態を提示し、それが下句との関係から見て、「理由」を示す〉〈③複数の事態が下句との関係から見て、「理由」を示す〉用法があり、それは発生段階から見られるものであった。こうした用法は、その発生の背景にあった形容詞「―シ」語尾の用法との関連から理解されるであろう。(22) に右の①用法、(23) に②用法、(24) に③用法を示す。

(22) a　法皇もおん涙を流せられ、おほせくださるる旨もなし、少将も涙にむせび、申しあげらるる旨もござなかった。　（天草版平家物語・36）

b　西王母が三千歳も昔語りで、今はなし。東方朔が九千歳も名のみ残って、姿はない、これが善知識のもとゐでござると言うて　（天草版平家物語・314）

(23) a　平家のかたには馬に乗ッたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨のふるやうに射けれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。　（平家物語・一二之懸）

b　浄妙に力をつけうとて、つづいて戦うたが、橋の行桁はせばし、通らうやうはなし、浄妙が甲の手先に手をおいて　（天草版平家物語・127）

(24) a　大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるりとふみかへしてンげり。　（平家物語・落足）

b　つはものども、「くらさはくらし、いかがせんずる」と口々に申しければ、九郎御曹司、「例の大だい松はいかに」。土肥二郎、「さる事候」とて、小野原の在家に火をぞかけたりける。　（平家物語・三草合戦）

また、接続助詞「し」については、「し」は「だろう」や「のだ」といった判断のレベルを表すモダリティ要素に接続することができるという。(6) 再掲。

(6) a　お金もある〔だろう／のだ〕し、時間もある

b　お金もあって、時間もある。

c　お金もあり、時間もある。

d　お金もあれば、時間もある。

「し」による並列が判断レベルのモダリティ要素にも承接するのは、右に述べたように「まいし」なる語形からの遊離独立したという発生経緯によるとみてよいであろう。

次に、〈理由を示す用法〉にいわれるところの表現性―緩やかな因果関係を示す―について、「不十分終止」との関わりから見てみる。

古典語終止形による「不十分終止」には、原因理由句を構成する用法があるが、これは（27）に見るように、「―は（も）―終止形」の形で提示されるものである。

(25) a　大の男の鎧着ながら、馬より舟へがはと飛び乗らうに、なじかはよかるべき。舟はちひさし、くるりとふみかへしてンげり。

（平家物語・落足）

b　平家のかたには馬に乗ッたる武者はすくなし、矢倉のうへの兵ども、矢さきをそろへて雨のふるやうに射けれども、敵はすくなし、みかたはおほし、勢にまぎれて矢にもあたらず。

（平家物語・一二之懸）

（25 a）は「舟はちひさし」が下句の「くるりとふみかへしてンげり」という事態の理由となっている。（25 b）は、矢を射るが、「敵はすくなし、みかたはおほし」であるため、当たらないことが書かれている。

（25 a）では理由となる事態が「舟はちひさし」で示され、（25 b）では「敵はすくなし」と「みかたはおほし」とが併記され、全体が理由句を構成している。これらは「―は（も）―終止形」という形式によって、事態を投げ出すかのように提示するものである。「ので」節・「から」節のような因果関係を明示する形式に対して、接続助詞「し」の理由を示す用法に於いて、その因果関係が希薄となるのは、その成立のベースにあった「―は（も）―古典語終止形」という形式による事態の提示の述べ方に帰因するとみてよかろう。

森山氏は、「～し～し」による並列を「交差的並列」であるとする。「交差的並列」とは「前件と後件とが一つの状況のなかでともに成立するという意味での並列関係」をいう。そういう並列関係であることから「矛盾する事態を並列させることはできない」とされるものであった。

(26) a　＊あの店の料理はおいしいしまずい。

［交差的並列］

b　あの店の料理はおいしかったりまずかったりした。［結合的並列］

たしかに、「し」の並列にあって、矛盾する事柄の並列は不適切のようであるが、

(27)　娘の結婚は〜うれしくもある〜し、〜悲しくもある〜。のような言い方はできそうに思う。「うれしくも

ある」「悲しくもある」とは相反するものでろう。もちろん、（26ａ）の「あの店の料理はおいしいしまずい」はやはり非文といわざる得ないであろう。にもかかわらず、（27）のような言い方もできそうなのは何故であろうか。

ところで、（27）の場合は言えそうであると述べたが、

(28)？　娘の結婚はうれしいし悲しい。

の場合であると、不自然な言い方となるように思う。

この違いは何かというと、（27）では「うれしくもある」「悲しくもある」とが並列されているのに対して、（28）では「うれしい」「悲しい」とが並列されていることである。このことは「～し～し」が並列するのは語レベルではなく、文レベルであるということを示しているのであろう。

(29)ａ　あの店の料理は安いしうまい。

ｂ　＊あの店の料理はおいしいしまずい。

（29）の並列は、それぞれの判断文（（30）参照）に対して、これを同一主語で統合した表現と見ることができよう。

(30)ａ　｛あの店の料理は安い｝／｛あの店の料理はうまい｝＝併存する事態

ｂ　｛あの店の料理はおいしい｝／｛あの店の料理はまずい｝＝併存しない事態

「し」が文レベルに承接するのも先に見た発生事情によるといえる。続いて、寺村氏のいうところの「統括命題」の存在について考えてみる。

(9)彼はピアノも弾くし、作曲もするし、歌も上手だ。

（9）の言い方に於いて、統括命題として、「彼は音楽の才能がある」が存在し、その具体的な事例として「ピアノを弾く」「作曲をする」「歌が上手だ」が示されているとする。なお、「統括命題の存在」に関して、白川博之氏は、「し」の用法を「併存用法」「列挙用法」とに分け、両者は寺村秀夫氏のいう「統括命題」の有無において異なるとしている。すなわち「列挙用法」は「統括命題」を常に伴うが、「併存用法」は伴わず、両者は区別して考えねばならないとされている。[注15]

(31)ａ　それは神秘主義ともあまり関係ないし、前世の問題とも関係ないし、霊界の問題とも直接、関係ないですね。　…【併存用法】

ｂ　平凡だし、変わった趣味もないし、可愛げもないし、不良っぽくもないし、フフフ、女性を引きつけるところ、少ないと思っています。　…【列挙用法】

「併存用法」「列挙方法」との統括命題の存在の有無との関係について、その理由など興味深い点でもあり、また、「し」の展開との関わりも予想されるところであるが、ここでは、統括命題の有無の指摘が為されていることに触れるにとどめておきたい。

さて、「併存用法」「列挙用法」によって、統括命題

の存在に違いがあると指摘されるが、「し」の並列用法にそうした命題の存在があるというのは一致している。それでは何故に「～し～し」の並列には統括命題なるものが存在するのであろうか。

(32) a　彼はピアノも弾くし、作曲もするし、歌も上手だ。

◆統括命題：「彼は音楽の才能がある」

◇事例：「ピアノを弾く」「作曲をする」「歌が上手だ」

b　平凡だし、変わった趣味もないし、可愛げもないし、不良っぽくもないし、フフフ、女性を引きつけるところ、少ないと思っています。

◆統括命題：「彼には女性を惹き付けるような魅力がない」

◇事例：「「平凡だ」「変わった趣味がない」「可愛げがない」

こうした統括命題の存在は、「し」成立のベースにある「不十分終止」のあり方に手がかりが得られそうに思う。「不十分終止」には、複数の事態が列挙され、それらが事態生起の理由であったり、判断の根拠となるものがあった。(33) を見られたい。

(33)　兄此レヲ聞クト云ヘドモ、既ニ夜ニハ成ヌ、従者ハ无シ。三条京極ノ辺ハ遙也。何ガハ可為カラム。

（今昔物語集・巻27・33）

たとえば、(33) は傍線部「既ニ夜ニハ成ヌ、従者ハ无シ。三条京極ノ辺ハ遙也」が波線部「何ガハ可為カラム」という判断を起こさせる理由となっている。これらの提示されるところの事態の一つ一つは何ら関係がないものであるが、発話者にとっては、それらは困った状況となっているのである。そうした状況を踏まえて、「何ガハ可為カラム」という判断を導き出しているということになる。

このように、ある事態の生起・何らかの判断を導く上での、根拠となる事態・認識が列挙されるが、その列挙されるところの事項には当然のことながら、事項間に関連性が存在するといえよう。

接続助詞「し」の用法として指摘されるところの統括命題の存在も右に見た「不十分終止」による並列との関連を見ることができるのではなかろうか。

## 五　おわりに

本稿では、現代語研究に指摘されるところの接続助詞「し」の用法上の特徴について、この語の発生の経緯等をもとに、その来由を考えてみたものである。あくまでも接続助詞「し」の用法の一部を取り上げたに過ぎない。

ところで、接続助詞「し」の用法に関して、前田氏は〈「し」が並べるのは、「因」だけではなく、その逆の「果」である場合もある〉との指摘し、(34) の例

を示される。[注16]

(34) a　正直なところ、彼が興味をもっているのは大橋登美子ではなくて、登美子が女であるという、その事だけだった。彼女が女であることには、抵抗し得ないような誘惑を感じる。けれども大橋登美子という人格が、邪魔だった。だから彼は今日まで一度も愛の告白や愛の誓いを与えなかったし、一通の手紙をも書かなかった。

（青春の蹉跌）

b　「うん、とってもよかった。ひとつの試合をやって千ドルもらったのかな、それだけあればひとつの家族が一年ちかく暮らせるんだって、あそこでは。だから、金に苦労はしなかったし、そこで洗礼も受けたし……でも、帰ってきて……あいつと別れることになったんだ」

（一瞬の夏）

辞典類にあって、「し」の用法としては、〈並列〉と〈原因理由〉とは立項されるが、〈果〉は立てられていない。たしかに、(34) の例は〈果〉を示しているが、注意しておくべきは「だから」の語が直前にあるように、そうした接続語の支えが必要であるように思うが、このことは、「し」が何を列挙するのかということを考える上でも興味深いように思う。触れ残した点は後考に俟ちたい。

［注］

(1) 拙稿「接続助詞「し」の成立過程」（『島大国文』28号／二〇〇〇年）

(2) 他に、森山卓郎氏「うどんにマヨネーズかけたりして」―並立の意味（『月刊言語』第26巻第2号／大修館書店／一九九七年）がある。

(3) 中俣尚己氏「「善人もいれば悪人もいる」のような並列文について―「し」を用いた並列との比較―」（関西言語学会　第30回記念大会発表要旨／二〇〇五年）。

(4) 寺村秀夫氏「並列的接続とその影の統括命題―モ、シ、シカモの場合―」『日本語学』3巻8号／一九八四年）（『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編―』（一九九三年／くろしお出版）に再録）。

(5) グループ・ジャマシイ『日本語文型辞典』（くろしお出版／一九九八年）。

(6) 注5に同じ。

(7) 森田良行氏『基礎日本語3』（角川書店／一九八四年）。

(8) 「不十分終止」なる用語については、鈴木浩氏「接続助詞『し』の成立」（『文芸研究』第64号／一九九〇年）の規定に従うものとする。

(9) 京極興一氏「終止形による条件表現―「平家物語」を中心として―」（『成蹊大学文学部紀要』

第一号／一九六六年）。小田勝氏『古代語構文の研究』（おうふう／二〇〇六年）。

（10）出雲朝子氏「『はさみこみ』について―文法史的考察―」（『国語学』143集）。鈴木氏注８論文。拙稿「不十分終止」の史的展開―旧終止形残存の文法史的意義―」（『語文研究』75号・一九九三年）。

（11）柏原司郎氏「接続助詞「し」の成立をめぐって」（『田辺博士古希記念国語助詞助動詞論叢』／一九七九年）。同「接続助詞『し』の成立についての補遺考」（『国語研究』43／一九八〇年）。鈴木氏注８論文。

（12）注11に同じ。

（13）注１論文。

（14）湯沢幸吉郎氏『室町時代言語の研究』による。

（15）白川博之氏「接続助詞「シ」の機能」／中右実教授還暦記念論文集編集委員会編『意味と形のインターフェイス下巻』（くろしお出版／二〇〇一年）。

（16）前掲前田氏論文。

（岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授）